

## 研究ノート

## 碎葉鎮城の大雲寺の位置と伽藍配置に関する試論

Location of the 大雲寺 (Dayun Temple) in 碎葉鎮城 (Suiye zhencheng) and hypotheses on the layout of the temple complex

山内和也<sup>※</sup>

※ 帝京大学文化財研究所

はじめに

I. 杜環の記録と大雲寺

II. 大雲寺と3つの仏教寺院

III. 第0仏教寺院=大雲寺の位置

IV. AKB-21区およびシャフリスタン2a南西部分  
における土地利用の変化V. 1966年に撮影された航空写真に見るベルン  
シュタムの発掘調査VI. 帝京大学シルクロード学術調査団による2024  
年春の調査地点

VII. 想定される伽藍配置

VIII. 第0仏教寺院および大雲寺の存続期間

おわりに

## はじめに

帝京大学シルクロード学術調査団は、2024年から龍谷大学と連携して、アク・ベシム遺跡において、かつてベルンシュタムが1939～40年に発掘調査を行なった地点<sup>1)</sup>で発掘調査を開始した(図1、2、5、6)。

杜環が記録に残した「碎葉鎮城の大雲寺」がこれまで見つかっている3つの仏教寺院(第0仏教寺院=ベルンシュタムが発掘した仏教寺院、第1仏教寺院[AKB-1]、第2仏教寺院[AKB-18])のどれにあたるのかという点については、いまだに結論が出ていない。これに関して、かつて筆者は「第1仏教寺院と第2仏教寺院からは中国様式の仏像、そして唐代の瓦等は一切見つかっていない」ことから、「アク・ベシム遺跡、つまりスイヤブに存在したとされる大雲寺は、ベルンシュタムらが発掘した第0仏教寺院である」と結論付けた(川崎・山内 2020, pp. 217-218)。

それゆえ、ベルンシュタムが発掘調査を行なった第0仏教寺院(AKB-0区)が「大雲寺」であることを明らかにするために、帝京大学シルクロード学術調査団は2024年から、龍谷大学の調査団と連携して、AKB-21区、つまり、ベルンシュタムが発掘調査を行なった地点で発掘を開始した。

本稿では、これまでの議論を踏まえた上で、発掘で得られた新たな知見を基に、碎葉城にあったとされる大雲寺に関して考察する。

先に進む前に、混乱を避けるために、ここで調査区の番号についてあらかじめ簡単に説明しておくこととする(図3)<sup>2)</sup>。クズラソフが1953～54年に調査を行なった際には、調査地点(遺構)に対して「I～V」の番号を付し、それ以後の調査ではそれに続くように順次、番号が付された。それゆえ、それ以前の1939～40年にベルンシュタムが調査を行なった地点については番号が付されていなかったことから、あらたにAKB-0という番号を付すこととした。それと同じように、クズラソフが調査を行なった仏教寺院が「第1仏教寺院」と名付けられたため、ベルンシュタムが調査を行なった仏教寺院については「第0仏教寺院」と名付けられた<sup>3)</sup>。なお、AKB-0区は、基本的にはAKB-20区およびAKB-21区と同じ地点を指している。他方、1939～40年に行なわれた発掘調査と区別するために、2023年に龍谷大学の調査団が調査を行なった地点に対しては「AKB-20」の番号を、そして2024年に行なわれた調査については、龍谷大学の調査団の調査地点には「AKB-21a」、そして帝京大学シルクロード学術調査団の調査地点には「AKB-21b」という番号を付した。

## I. 杜環の記録と大雲寺

『通典』卷一九三「边防九 石国条引 杜環『経行記』」(p. 5275)には以下のような記述がある。



図 1. 遺跡全体写真（1966 年撮影の空中写真）

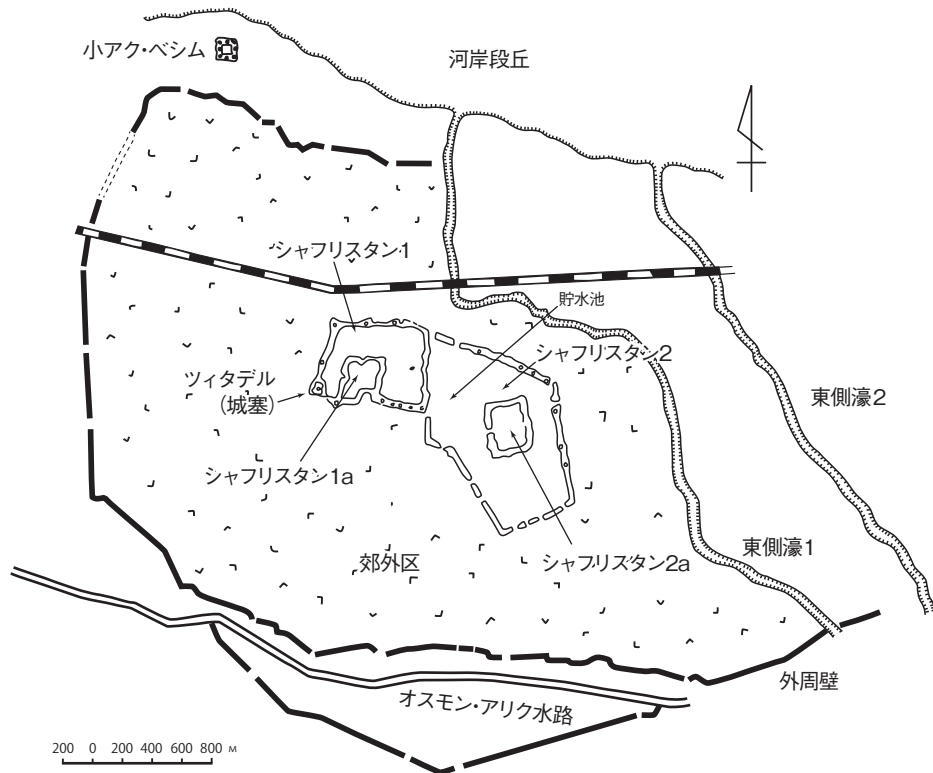


図 2. アク・ベシム（スイヤブ）遺跡全体図および呼称



図 3. アク・ベシム（スイヤブ）遺跡の発掘地点番号

又有碎葉城天寶七年北庭節度使王正見薄伐城壁摧毀  
 邑居零落昔交河公主所居止之處建大雲寺猶存

この短い記述については、次にあげるような読み  
 が一般的であるとされてきた。ここでは、Forteに  
 よって提案された新たな「読み」と対比させるた  
 めに、Forte自身による英訳を引用しておく。（Forte  
 1994, p.42, 下線は筆者追加）。

There is also the walled city of Suiye. In the 7th  
 year of Tianbao (748) Wang Zhengjian, the Military  
 Commissioner of Beiting (Beshbalıq) , attacked it,  
 [therefore] the wall of the city are destroyed and the  
 dwellings of the village(s) are in ruin. At the place  
 where Princess Jiaohe in the past had lived the Dayun  
 Monastery was erected which still exists.

つまり、「交河公主がかつて居止したところに大雲  
 寺が建てられ、それは猶存在している」というもの

で、「交河公主が居止したところ＝大雲寺」とする  
 ものであった。

これに対し、Forteはその当時の歴史的な背景や  
 大雲寺の建立時期との齟齬、クズラソフによる新  
 たな発掘調査（山内 2022を参照）の成果を踏まえ、  
 この杜環の記録について次のような解釈を提案して  
 いる（Forte 1994, p.53）。

Du Huan gives us in three flashes three separate episodes  
 in the life of Suiye which he presents in a strictly inverted  
 chronological order: first Wang Zhengjian's assault of the  
 walled city (748), then the stay at Suiye of the princess  
 (from 723), last the Dayun Monastery which had been  
 constructed at the end of the seventh century (after 692).

それによれば、杜環はスイヤブの一生（歴史）に  
 関する3つのエピソードを3つの短報として、厳密  
 に時系列を逆にして伝えているということになる。

その3つのエピソードとは、「王正見が碎葉城の城壁を破壊したこと（748年）」、「交河公主が住んでいたこと（723年から）」、「大雲寺が建てられて、なお存在していること（692年以降）」<sup>4)</sup>ということである。それを踏まえて、Forteは次のような読みを提案している（Forte 1994, p. 53）。この読みでは、3つのエピソードが別々のものとして捉えられており、また「交河公主の居止したところ＝碎葉城」という認識となっている。

There is also the walled city of Suiye. In the 7th year of Tianbao (748) Wang Zhengjian, the Military Commissioner of Beiting (Beshbalıq), attacked it, [therefore] the wall of the city are destroyed and the dwellings of the village(s) are in ruin. It is the place where Princess Jiaohe in the past had lived. The Dayun Monastery which had been erected [at Suiye by the Chinese] still exists.

現在では、このForteによる提案が一般的に受け入れられるようになってきている。以下に、柿沼陽平と齊藤茂雄による読みを引用しておく。なお、王正見が破壊したとされる碎葉城の城壁がシャフリスタン1の城壁であったのか、シャフリスタン2の城壁であったのかは定かではない。しかしながら、後述するように、大雲寺はシャフリスタン2に存在したのであり、また杜環が漢人として認識し、記した「碎葉城」というものが唐軍が建設した「碎葉鎮城」そのものであるとすれば、王正見が破壊した城壁はシャフリスタン2の城壁であった可能性が高い。

また碎葉城がある。天宝7年（748年）に、北庭節度使の王正見が征伐し、城壁は碎き壊され、邑居は荒廃した。むかし交河公主（阿史那懷道の娘。722年12月に玄宗が封じ、突騎施の蘇祿可汗に嫁ぐ）が「居止」されたところで、大雲寺が建てられており、まだ残存していた（柿沼 2019, p. 52）。

さらに碎葉城（アク・ベシム遺跡）があり、天宝七（748）年に北庭節度使の王正見が侵攻したので、城壁は破壊し尽くされ、集落は衰退した。かつて交河公主が留めおかれていた所である。大雲寺が建てられており、現存している（齊藤 2023, p. 78-80）。

## II. 大雲寺と3つの仏教寺院

次にこの「大雲寺」とこれまで発掘された3つの仏教寺院（第0、第1、第2仏教寺院）との関係について検討していくこととする。なお、第2仏教寺院については、これまで大雲寺との関連が論じられたことはないことから、ここではおもに第0仏教寺院と第1仏教寺院を取り上げることとする。

杜環の記述に関する新しい読みを提案したForteは次のように述べている（Forte 1994, p. 51）。

This does not mean that I reject Zhang's identification of the ruins of Ak Beshim with the ancient Suiye and of major monastery's ruin with the Dayun-si of Du Huan's passage. On the contrary, I also am convinced that the ruins of the Buddhist monastery must be those of the ancient Dayun-si. I believe that the fact that the two statues of Śākamuni and Maitreya have been found there would be quite normal for a Dayun Monastery.

Forteは、張広達が論じたように（張広達 2008）、第1仏教寺院で見つかった釈迦と弥勒菩薩の塑像に基づいて、クズラソフが発掘した第1仏教寺院が「大雲寺」であったと認識していたようである。

これに先立ち、アク・ベシム遺跡をスイヤブに比定したクローソンは次のように述べている（山内・吉田 2021, p. 93）。

紀元後748年には〔北庭節度使の〕王正見 Wang Chenchien がスイヤブを占領し「交河公主がかつて居住していた場所に大雲寺」を建設した。これは、クズラソフによって発掘された仏教寺院（発掘リストのNo.2）であることはほとんど間違いないが、その寺院が長く存続することはとてもできなかっただろう。

これに対して、第1仏教寺院の発掘を行なったクズラソフは、クローソンの結論を受けて次のように述べている。なお、このクズラソフの見解は2006年に出版された本の中で示されたものである（山内 2022, pp. 228-229）。

都市遺跡アク・ベシムを都市スイヤブの廃墟に比定したクローソンは、発掘された僧院の考古学的に得られた建設年代を考慮し、1960年にはじめて、こ

れ〔第1仏教寺院〕は、748年に交河公主が住んでいた場所に〔北庭節度使〕王正見將軍が建設した大雲寺であると述べた。この比定の正確さに自信があったジェラルド卿（クローソン）は、私たちが提案した第1号遺構の初期層〔古い層〕の年代を8世紀に変更するように求めた。

明らかに、この仮説は考古学的な年代推定と完全に一致するものではない。調査隊によって得られた資料に基づけば、寺院の建設を8世紀半ばよりも早い時期、つまり7世紀末から8世紀初めに帰することができる。この問題は、私たちの発掘調査に基づき、1979年に北京の歴史学者の張広達が行い、そののちフォルテが補足し、発展させた中国史料との新たな比較研究によって解決された。

クズラソフは考古学者としては、当初、第1仏教寺院を大雲寺に比定することには懐疑的であったが、最終的にはこの提案、つまり第1仏教寺院を大雲寺に比定することを認めたようである。ここでは「調査隊によって得られた資料に基づけば、寺院の建設を8世紀半ばよりも早い時期、つまり7世紀末から8世紀初めに帰することができる」と述べている。これはスミルノヴァによるテュルゲシュ・コインといわゆる「テュルゲシュ式コイン（トゥフス・コイン）」コインの年代観と順序に関する見解、つまりテュルゲシュ式コインがテュルゲシュ・コインに先行するという考えに基づいている（Кызласов Л.Р., Смирнова О.И., Щербак А.М. 1958.）。

クズラソフは第1仏教寺院におけるコインの出土状況について、以下のように述べている（山内 2022, pp. 222-223）。

寺院の下層では、三叉槍の形をしたタムガとソグド語の銘をとともう（この都市の領主によって発行された）小さなテュルゲシュ式コイン〔トゥフス・コイン＝ワナントマーフ・コイン〕だけがいたる所で発見されたが、弓形のタムガをとともう 8世紀のテュルゲシュ・コインそのものは、上層でのみ出土していることは強調されるべきである。この状況に基づけば、テュルゲシュ式コインは、テュルゲシュ・コインそのものよりも前に発行され始めたと推測することが可能である。すなわち、〔テュルゲシュ式コインが発行されたのは〕「おそらく、7世紀の末、この寺院が建設されたときで、〔この寺院は〕8世

紀初めまで存続し続けた」。発見されたすべての出土品および建築やその他の類似点は、この年代付けと矛盾しない。（山内 2022, pp. 222-223）

また、それに続けてテュルゲシュ式コインの出土状況について以下のように述べている。

同じテュルゲシュ式コインが、中庭を除けば、広間の柱の木製の基部〔柱礎〕の下（1点）、広間の床面（2点）、祠堂の床面（1点）、回廊の北翼部の床面で（1点）、そしてもっとも重要なことに、祠堂（部屋 III）の壁の分割されたパフサ・ブロックのなか（1点）で発見されたことの意味は大きい。最後の出土品は、寺院の主要な壁の建設中に流通していたのは、これらの〔テュルゲシュ式〕コインであることを示している。初期の寺院の建物の床面、そして同じく広間の柱の下で発見された上述のコインは、同じ〔結論を〕示している。（山内 2022, pp. 222）

つまり、クズラソフは、スミルノヴァによるコインの編年、そしてテュルゲシュ・コインとテュルゲシュ式コインの出土状況を比較検討したうえで、「テュルゲシュ式コインがテュルゲシュ・コインに時代的に先行する」と考えており、それに基づいて第1仏教寺院の建設の年代を提案していることとなる。

しかしながら、アク・ベシム遺跡から出土したテュルゲシュ・コインとテュルゲシュ式コインの年代観については、新たな見解も示されている（山内・吉田 2021, p. 101）。つまり、テュルゲシュ・コインが時代的に先行するものであり、テュルゲシュ式コインがより新しいものであるとする見解である。テュルゲシュ・コインが蘇祿によって715年頃から738年頃に発行されたものとすれば、テュルゲシュ式コインはそれ以降に発行されたことになる。上述のように、テュルゲシュ式コインは「寺院の下層では」「いたる所で発見された」のみならず、「広間の柱の木製の基部〔柱礎〕の下」や「祠堂（部屋 III）の壁の分割されたパフサ・ブロックのなか」で発見されている。これはクズラソフが述べているように「寺院の主要な壁の建設中に流通していた」コインであることを示していることから、第1仏教寺院の建設は8世紀の半ば以降ということになる。それゆえ、第1仏教寺院が大雲寺である可能性は考えられな

い。

なお、コルチェンコはこれまでのクズラソフ（下の引用では「キズラソフ」）の見解の変遷を踏まえたうえで、次のように述べている。この見解は現在のキルギス考古学者の見解を代表するものとみなすことができる。

L. R. キズラソフは、彼らが調査した遺跡を古文書でよく知られた「大雲寺」に同定したが、その際、彼はG. クロウソン、張廣達、A. フォール（ママ）の研究を慎重に検証したうえで、自説に立脚し、その建立の年代を、7世紀の最末期から8世紀初頭、つまり西暦692年と705年の間であると推断した。（コルチェンコ 2020, p. 212）

その一方でコルチェンコは、第0仏教寺院について次のようにも述べており（コルチェンコ 2020, p. 225）、ベルンシュタムが発掘した仏教寺院が「大雲寺」であるという可能性も示唆している。

しかし、A・N・ベルンシュタムによって部分的に発掘された仏教遺跡AB-Oは石碑とシャフリスタン2の内部におけるその出土地点に基づいて再考された年代に関する記録を考慮すれば、十分な根拠をもってこれに求めることができる。

加藤九祚は、アク・ベシムの仏教寺院と「大雲寺」の関係について次のように述べている（加藤 1997, p. 159）。なお、加藤が述べる「防壁」とは現在の第2シャフリスタン、つまりかつてラバドと呼ばれていた区画の外周壁のことであるが、この防壁が碎葉鎮城の「防壁」であったとは認識していなかったようである。

アクベシムの3つの仏教寺院の中で、今のところ創建の年代から見て大雲寺に最も近いのは第1仏教寺院であるが、しかし実質的に最も中国的要素の多いのは、アクベシム都城址の防壁内の僧院址である。ただ年代がベルンシュタムによって9-10世紀に比定されていて、大雲寺の年代とはちがすぎる。私には、第1仏教寺院が大雲寺であったとは考えられない。それが防壁の外側にあり、しかも建築技術において全体にあまりにも中央アジア的色合いが強すぎるからである。大雲寺は今も地下に眠っている

かも知れない。

これに対し、上述したように、筆者はかつて、これまで発見されている3つの仏教寺院のうち、どれが大雲寺にあたるかという点について、以下のような見解を述べた（川崎・山内 2020, pp. 217-218）。[ ]は筆者が追加したものである。

これまでアク・ベシム遺跡、つまりスイヤブでは、3つの仏教寺院が発見されている。すなわち、ベルンシュタムが発掘した第0仏教寺院（AKB-O）、クズラソフが発掘した第1仏教寺院（AKB-1）、そしてズィヤブリンが発掘した第2仏教寺院（AKB-18）である。大雲寺がアク・ベシム遺跡のどこに位置していたか、つまりこれまで発掘されたどの寺院が大雲寺に当たるのかについては諸説あり、いまだに結論が出ていないとされることについてはすでに加藤が論じたとおりである。しかしながら、本翻訳にある「仏教小礼拝堂」[AKB-O区]からは、中国様式の仏像が出土しており、また、近年の調査によって瓦片の年代が唐代、さらには8世紀の後半に比定されるようになった。

これに対して、第1仏教寺院と第2仏教寺院からは中国様式の仏像、そして唐代の瓦等は一切見つからない。それゆえ、アク・ベシム遺跡、つまりスイヤブに存在したとされる大雲寺は、ベルンシュタムらが発掘した第0仏教寺院である可能性が高いと結論付けることができる。

筆者のこの考えはいまも変わっておらず、碎葉鎮城の中核部（AKB-15）の発掘が進むにつれ、むしろその確信は強まっている。第0仏教寺院の再発掘が進めば、この第0仏教寺院が大雲寺であったことを示す直接的な証拠、つまり碑文や石碑のようなものが発見されることが期待できよう。

ここで行なった検討を終えるにあたり、吉田豊の見解を引用しておく（吉田 2024, p.100）。

シャフリスタン2が唐の碎葉鎮城であることが確実となった今、杜環が見た大雲寺がどこにあったかが改めて問題となる。大雲寺は碎葉鎮城内にあったに違いないので、Bernshtamが発掘し、佛教にかかわる遺物が発見された区域（AKBO）が、大雲寺であった可能性が高くなった。

### Ⅲ. 第0仏教寺院=大雲寺の位置

ベルンシュタムが調査を行なった第0仏教寺院の位置は長らく不明であった。それは、1970年代以降に進んだ土地の削平と耕地化によってかつての地形が失われたとともに、発掘調査の痕跡もまた削平されてしまったからである。ベルンシュタムの発掘調査とその地点の特定に関しては、すでに川崎・山内2020の「解題」で述べたとおりであるので、詳細についてはそちらを参照願いたい（川崎・山内2020, pp. 215-219）。ここでは、ベルンシュタムの発掘地点の特定に至った経緯を簡単に説明しておく。

図4は、ベルンシュタムが作成したアク・ベシムの遺跡地図であるが、そこには調査地点が示されていない。また報告書における発掘地点に関する記述も詳しいとはいえず、場所の特定は難しいものであった。

その一方で、ベルンシュタムの発掘地点を特定する手掛かりとされてきたのが、図5に示したカジミヤカが作成したアク・ベシム遺跡の遺跡地図である。この地図にはベルンシュタムの発掘調査地点が図示

されている。しかしながら、このカジミヤカの地図に示された地点とベルンシュタムによる記述が対応していないように見受けられ、結果として、発掘地点の特定には至らなかった。

この問題を解決するための糸口になったのが、2017年にキルギス共和国国家地図測量局（Государственная картографо геодезическая служба Кыргызской республики）より入手された1966年に撮影された空中写真である。1966年撮影の空中写真には、ベルンシュタムが1939～1940年に発掘した地点のみならず、1953～54年にクズラソフが発掘調査を行なった地点についても、それらの痕跡が明確に写っていた。この空中写真を利用することで、図6に示すように、1966年の空中写真上でベルンシュタムが発掘した地点を特定することができた。

最終的には、図7に示したように、現在も残る地上物（道路や送電塔等）を基準点とし、1966年撮影の空中写真を現時点で得られる空中写真に重ね合わせることで、第0仏教寺院の位置を明らかにすることができた。なお、図7のベースとしている空中写真は2022年にJICAプロジェクト（チュイ州世界遺

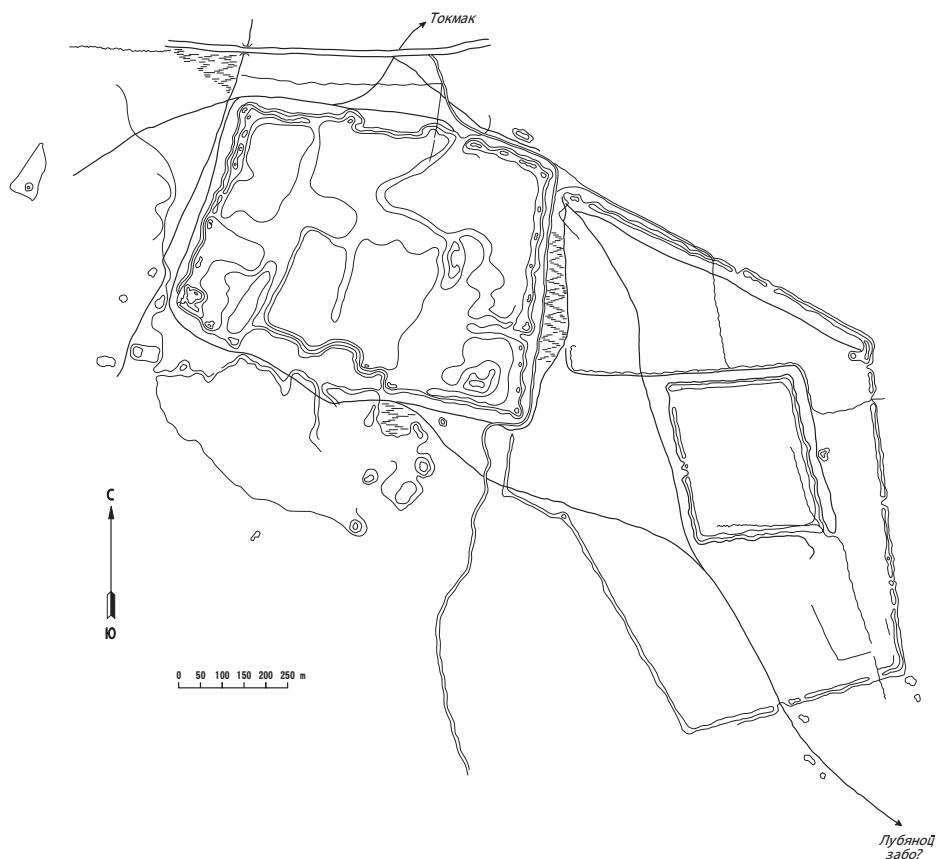


図4. ベルンシュタムが作成したアク・ベシムの遺跡地図（川崎・山内2020, 補図4）



図 5. カジミヤカが作成したアク・ベシムの遺跡地図（川崎・山内 2020, 補図 5）



図 6. 推定されるベルンシュタムによる試掘坑および発掘区の位置（望月・山内・アマンバエヴァ 2020, 補図 6）



図 7. 第 0 仏教寺院およびシャフリスタン 2a :  
2022 年測量の DSM に 1966 年撮影の空中写真を透過率 50% で重ね合わせたもの (望月秀和氏作成)

産を活用した地域開発・観光促進プロジェクト）によって作成されたものである。この合成写真では、左下に方形の壁で囲まれた区画（トルトクリ）、つまり寺院域とベルンシュタムの発掘調査の痕跡が確認できる。

#### IV. AKB-21区およびシャフリスタン2a南西部分における土地利用の変化

続いて、発掘調査の成果および1966年、1980年、2002年、2019年に撮影された空中写真を用いて、

AKB-21区およびシャフリスタン2a（「碎葉鎮城の内城」<sup>5)</sup>部分）の南西部分の土地利用の変化を検討する。

ここでは図8a～8dの4枚の空中写真中に「○」で示した送電塔の位置に着目し、この地点の土地利用の変化を検討する。1966年の空中写真では、送電塔はシャフリスタン2aの西壁の上に立っていることが確認できる。その一方で、1980年の空中写真では、その西壁が判別できなくなっており、さらには送電塔が葦の茂る水路の中に位置しているように見える。2002年と2016年の空中写真でも同様であり、西



図8a 1966年

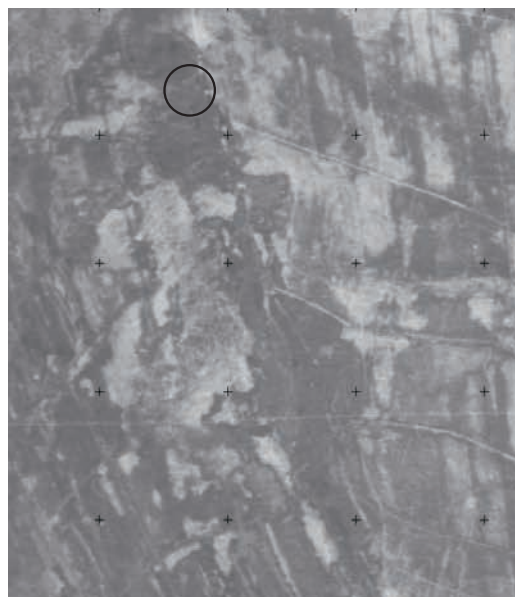


図8b 1980年



図8c 2002年



図8d 2019年

図8. AKB-21区とシャフリスタン2a南西部分の土地利用の変化（○は送電塔の位置）

壁の痕跡はまったく見受けられなくなり、また送電塔も水路の中に位置していることがわかる。

この変化に基づけば、1970年代に水路の流路が変更され、それにとまって西壁が崩され、削平されたものと理解できる。おそらく図8aの中に矢印で示した部分の壁を壊し、水の取り入れ口を新たに造り、シャフリスタン2a内に水を引き込むとともに、順次、西壁を削平し、耕作地化を図ったのであろう。

図7を見ると、現在の水路はかつてのシャフリスタン2aの西壁の東側、つまり西壁の内側に位置しており、かつての西壁の少なくとも南半分は水路の中に入ってしまったことが理解される。西壁の北半分および北西隅は水路の東側に残っているものと推定されるが、これについては発掘によってその存在を確認する必要がある。

## V. 1966年に撮影された航空写真に見るベルンシュタムの発掘調査

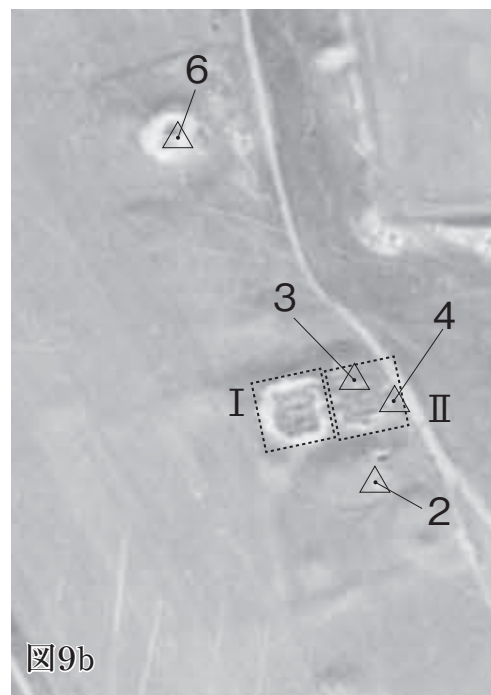
図9aは1966年に撮影された航空写真を部分的に拡大したものである。上述のとおり、1966年時点では、かつて1939～40年にベルンシュタムが発掘を行なった地点を明確に確認することができる。図9bはこの航空写真に発掘区IとII、試掘坑2、3、4、6を図示し

たものである。

また、ベルンシュタムが作成した簡便な遺構全体図（図10a）によれば、ベルンシュタムはこのトルトリ（方形区画）の中に8つの丘状の高まりを確認している。図10bはベルンシュタムによる遺構全体図と1966年撮影の空中写真を比較し、その当時、この方形区画内（＝AKB-21区）に存在していたと想定される丘（現在では平坦な耕作地になっており、丘の痕跡は確認できない）に便宜的にA～Hの番号を付したものである〔川崎・山内 2020, 挿図8を基に作図〕。

図11は、同様に、1966年撮影の空中写真に丘の番号を付したものである。これによれば、ベルンシュタムは、1939年にC丘に試掘坑3、4を設置し、F丘に試掘坑2を設定し、1940年にはB丘に発掘区Iを、そしてC丘に発掘区IIを設置したことになる。

ベルンシュタムによれば、全体の区画（＝「トルトリ」）の大きさは（南北）113×（東西）64m、F丘の大きさは（東西）35.50×（南北）21m、C丘の大きさは（東西）21.50×（南北）12.50mであった。それぞれの丘の地下に基壇が存在していたと想定した場合、F丘の基壇の大きさは「（東西）100尺×（南北）60尺？」、C丘の基壇の大きさは「（東西）60尺×（南北）40尺？」となる可能性があるが、この仮



△：試掘坑 □：発掘区

図9. 1966年撮影の空中写真とベルンシュタムによる発掘調査地点

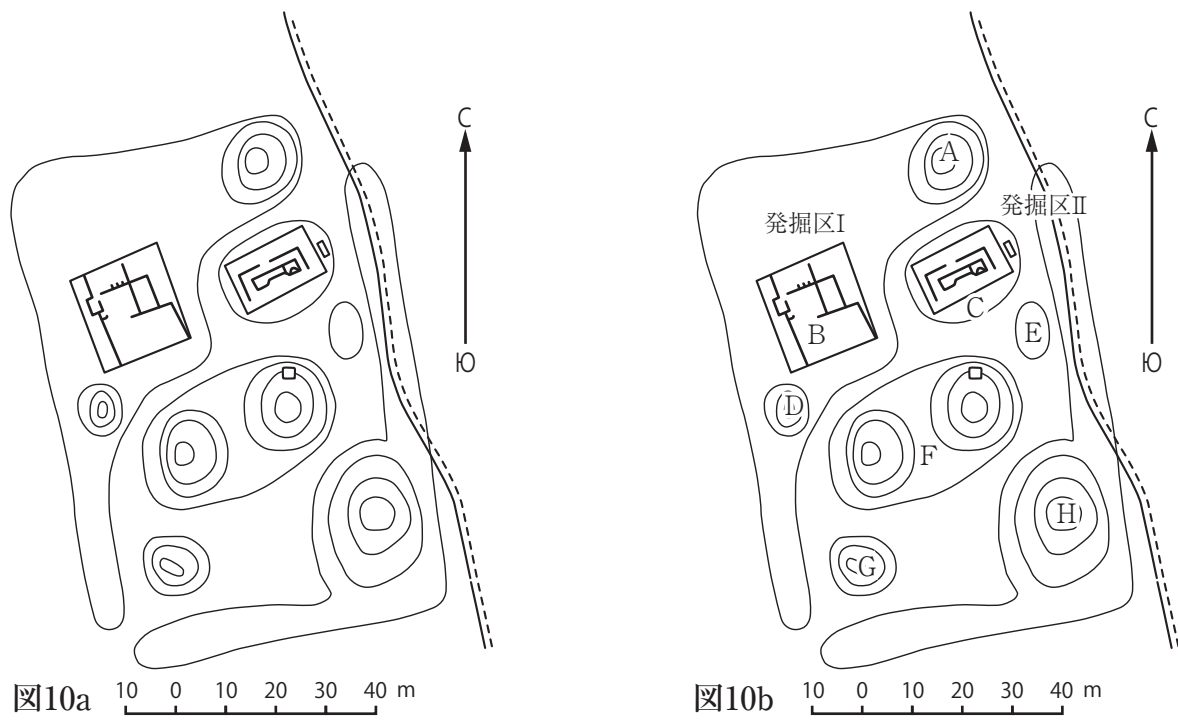


図 10. ベルンシュタムによる遺構全体図（＝寺域）



図 11. 1966 年撮影の空中写真と丘の配置

説の正否については、次年度以降の発掘によって明らかになろう。なお、全体の区画に関しては、「尺」を適用するとすれば、南北400尺、東西200尺となる可能性もある。

## Ⅵ. 帝京大学シルクロード学術調査団による2024年春の調査地点

図12は、図7に2024年の調査区（Tr.1/21b/2024、Tr.2/21b/2024）および龍谷大学調査団の調査区を重ねたものである。この合成写真は、いくつかある送電塔を基準点として重ね合わせたものであるが、1966年撮影の空中写真には撮影時の歪みがあり、補正されていない。それゆえ、この位置関係が完全に

正確なものであるとはいえないものの、おおむね正確であるということが出来る。なお、Tr.1/21b/2024は長さ110m、幅3m、Tr.2/21b/2024は長さ15m、幅3mで、深さはそれぞれ約40~50cmで、この深さは耕作土および耕作による攪乱が及ぶ深さに対応している。

図13および図14はAKB-21区の全景写真で、図13は南側から、図14は北側から撮影したものである。図13の写真上方には送電塔が確認できる。上述のとおり、現在では、この送電塔は幅の広い葦原をともなう水路の中に位置していることが確認できる。また、かつては8つの丘状の高まりが存在してはざであるが、現在は平坦な耕作地となっていることが分かる。

図15は、AKB-21区の調査区の配置および遺構の



図12. AKB-21 区の調査区の配置（図7に調査区を合成したもの）



図 13. AKB-21 区全景（南から）





図 15. AKB-21 区の調査区の配置および遺構の検出状況

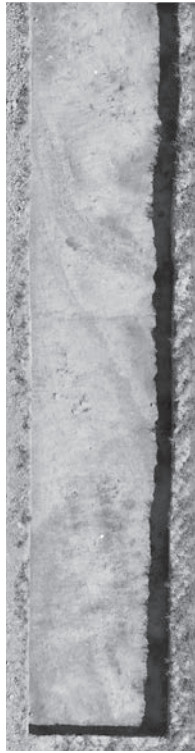


図 16.Tr.1/21b/2024  
遺構 a の検出状況

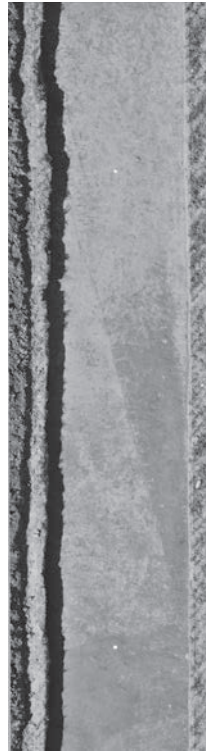


図 17.Tr.1/21b/2024  
遺構 b の検出状況

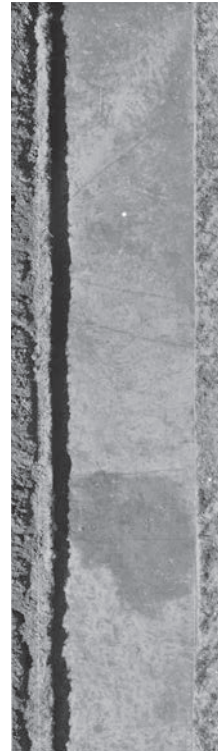


図 18.Tr.1/21b/2024  
遺構 c の検出状況



図 19.Tr.1/21b/2024  
遺構 d の検出状況

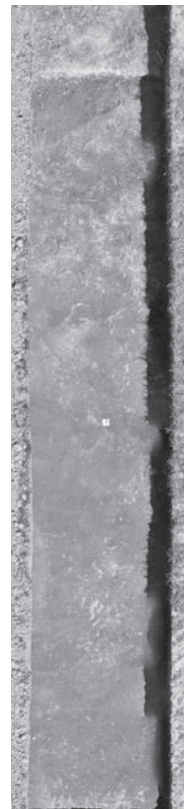


図 20.Tr.1/21b/2024  
遺構 e の検出状況

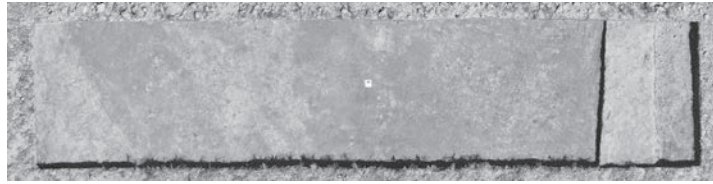


図 21.Tr.2/21b/2024 遺構 f の検出状況

検出状況を示したものである。Tr.1/21b/2024およびTr.2/21b/2024内で検出された遺構も図示してある。また図16～21は図中の番号に対応する地点の写真である。

以下にそれぞれの遺構について説明する。<sup>6)</sup>

・遺構a (Tr.1/21b/2024)

遺構aが検出された地点は、図11のF丘の東端に位置する。建物の基礎（基壇）と推定される。遺構bと同様に基壇の範囲内には夾雑物がなく、遺構の周囲に瓦や白色の土塊が混在していた。この白色の土塊は壁等の漆喰である可能性がある。また遺構およびその周りに堆積する遺物を包含する層に沿って、土質の異なる帯状のプランが確認された。基壇周辺の高低差に起因して重層的に堆積した埋没過程を示すと考えられる。確認した範囲での建物東辺の長さは約10m、地表面から確認面までの深さは約60cmである。

・遺構b (Tr.1/21b/2024)

遺構bが検出された地点は、図11のC丘の東端、ベルンシュタムの発掘区IIの東端に位置する。建物基壇の南東隅と推定される。遺構aと同様に基壇の範囲内には夾雑物がなく、遺構外側には瓦と白色の土塊が混在していた。トレンチ西壁の断面では約10cmの厚みの版築構造が確認できた。検出した範囲では南東隅まで約3m、南東隅からトレンチ西壁までの東辺の長さは約12.3m、地表面から確認面までの深さは約50cmである。

・遺構c (Tr.1/21b/2024)

遺構cが検出された地点は、Tr.1/21b/2024の南端から約50m、Tr.1/21b/2024のほぼ中央に位置し、図11のA丘の東側にあたる。トレンチ西壁の土層観察では、黒褐色土の上に黄褐色土を積み重ねている状況が確認でき、版築状の構造であったと推定される。地表面から確認面までの深さは約44cm、遺構の南北の幅は約5.1mである。

・遺構d (Tr.1/21b/2024)

遺構dが検出された地点は、Tr.1/21b/2024の北端から35mに位置する。トレンチ西壁の土層観察では黄褐色土の上に黒褐色土を盛り上げていた。地表面から確認面までの深さは約50cm、遺構の南北の幅は約5.5mである。

・遺構e (Tr.1/21b/2024)

遺構eが検出された地点は、Tr.1/21b/2024の北端に位置する。遺構dに類似した黒褐色土と黄褐色土が互層になる版築状の構造が確認された。その範囲は南北約12mである。1966年の航空写真が示すようにシャフリスタン2の壁の南西隅にあたるものと推定される。他所と比較して遺物の出土量は少なく、遺構北側に入り込んだアシの植生は水路が通された影響によるものと考えられる。

・遺構f (Tr.2/21b/2024)

遺構fが検出された地点は、図11のC丘の東側に位置する。仏教寺院の東壁にあたるものと推定される。地表面から確認面までの深さは約40cm、検出面では幅約5.2mである。

## Ⅶ. 想定される伽藍配置

全体の調査が進んでいない現時点で断定的なことは言えないが、1966年撮影の空中写真とベルンシュタムの発掘調査、そして2024年の調査の成果に基づき、伽藍配置に関する仮説を提示しておく。

まず、図10および図11に示した通り、ベルンシュタムは8つの丘状の高まりを認識していた。1966年撮影の空中写真で注目されるのはF丘である。この丘は他の丘と比べると、東西に長いという点が特徴的である。ベルンシュタムは「その〔トルトクリ〕中央部には、面積〔大きさ〕35.50×21m、高さ1.50mをなす、頂部がわずかに窪んだ細長い丘があった」

と記しており、さらには試掘坑2を設定して調査を行なったところ、「地表から深さ0.30～0.55m地点で、おもに赤土からなる瓦片層が検出された」と述べている（川崎・山内 2020, p. 222）。さらには、発掘区IIの調査に関する報告では以下のように述べている。

これらの小規模の部屋、そして部屋の北壁および南壁の間の土層はすべて、ふるいにかけられたようなきれいな土で、突き固められていたが、この層については発掘しなかった。

この記述によれば、「ふるいにかけられたようなきれいな土で、突き固められていた」土層は版築工法で造られた基壇であった可能性が高い。

それゆえ、この丘の地中に基壇が埋もれているとすれば、その大きさは、「（東西）100尺×（南北）60尺？」に相当することとなる。おそらくこの建物が伽藍の中心的な建物であったものと考えられる。また、発掘調査で検出された遺構aは、この建物の基壇の東辺にあたるものであり、全体の配置および丘の形状（東西に長い長方形）を考慮すれば、寺院の中核をなす「金堂」のようなものであった可能性が高い。

次にG丘を見てみると、写真に写っている形状は正方形をなしており、空中写真から推定するとその大きさは約10×10mとなるものと推定される。AKB-15区（碎葉鎮城の中枢部）での調査では、基壇と推定される遺構の痕跡は東西方向に長い長方形をなしていることと比較すると、正方形の基壇を持つ遺構は特徴的なものといえ、この基壇は塔の基壇であった可能性がある。

B丘とC丘については、それぞれベルンシュタムは「僧院の居室」と「仏教礼拝堂」としている。とくにB丘ではカマドや炉といった生活の痕跡が見つかっていることが特徴的である。発掘調査で検出された遺構bは、ベルンシュタムの調査における発掘区IIの東端の地点にあたり、基壇の東辺および東南角、そして南辺の一部であると推定される。それゆえ、この遺構bはベルンシュタムが調査した「仏教礼拝堂」の一部であると考えられる。

後代において建物や部屋の用途が変更となった可能性も考慮に入れる必要はあるが、ベルンシュタムによる発掘調査の成果に基づけば、B丘に存在して

いた建物については、ベルンシュタムが想定しているように、「僧院の居室」あるいは「僧房」のようなものであったと考えられる。他方、C丘については、発掘で仏教関係の遺物が出土していることを考慮すれば、この地点には仏教の儀礼に関係する建物があったと考えられることから、現時点では仮に「講堂」としておく。

この仏教寺院の伽藍配置を推測するための材料はきわめて少ないが、この寺院が大雲寺であったとすると、長安の大雲経寺に関する記述、そして向井佑介氏による双塔伽藍の研究が大いに役に立つ。以下、向井氏の論考からの引用である（向井 2020, pp. 258-259）。なお、引用にある『西京新記』は開元10年（722）頃に成立したものとされている。

唐長安城にあった双塔寺院のひとつが、懷遠坊の大雲経寺である。天授元年（六九〇）則天武后が天下諸州に設置した大雲経寺（大雲寺）の筆頭が、長安のそれであった。この地は、西市の南側に位置する繁華街で、東側は大路をはさんで延康坊西南隅の西明寺と対峙していた。大雲経寺の伽藍について『西京新記』巻三は次のようにいう。なお、括弧内は『長安志』巻一〇によって補ったものである。

東南隅。大雲経寺。（もと光明寺と名づく。）開皇四年、文帝が沙門法経の立つところ。（・・・武大后の初め、此の寺の沙門宣政大雲経を進む。経中に女主の符あり、困りて改めて大雲経寺となし、遂に天下に令して州ごと一大雲経寺を置かしむ。此の寺の当中に宝閣あり、崇さ百尺、時の人之を七宝台と謂う。）寺内に二浮図あり、東西相値う。（東浮図の北に仏塔あり、三絶塔と名づく）隋文帝の立つところ。塔内に鄭法倫（輪）・田僧亮・楊契丹の画跡、及び技巧韓伯通の素（塑）作せる佛像あり。故に三絶を以て名となす。

この記録は、長安の大雲経寺の寺内に東西2つの仏塔があったことを伝えるものである。この記述を参考にふたたび図11に示した丘の配置について検討してみる。

上述したとおり、F丘は寺域内のほぼ中央にあり、東西に長い建物であったものと考えられる。この建物が中心的な建物であったとすれば、これは仏を祀った金堂のようなものであった可能性が高い。

その南側に位置するのがG丘とH丘である。上述したとおり、G丘の中心部分の形状は正方形を呈しており、塔の基壇であった可能性がある。他方、空中写真に写っているH丘を見ると、中心部がやや暗くなっており、その周辺がドーナツ状に白っぽくなっていることが理解される。つまり、H丘は中心部に窪みがある円形を呈しており、中心部が白く写っている、つまり中心部が高くなっているG丘とは形状が異なる。推測の域を出ないが、この形状はこの地域に多数存在しているクルガン（古墳）の盗掘の痕跡と形状が類似している。いつの時代かは不明であるが、盗掘者がこの丘をクルガンと思いこみ、盗掘を行なった痕跡が、まさしく図11に見られる形状となって残っているものと考えられる。

図11では、このG丘とH丘の南側には寺域の南壁が確認できるが、そのほぼ中央にあたる部分では、壁に直交するような切り込みのような形状が見える。「南門」とした地点の両側に空中写真で白っぽく写っている高まりがあり、その間がやや暗めに

写っている部分がそれにあたる。おそらくこの部分は寺域内に至る南門であったものと考えられる。

以上の考察を基に作成したのが、図22に示した伽藍配置想定図である。2024年の発掘調査では、地表下約40～60cmで基壇と推定される遺構が確認されていることから、1970年代以降に土地が削平され、耕地化が進んでいるとしても、発掘調査を行なえば、平面的には、図22に示した建物（ただし基壇のみ）の位置とその大きさを明らかにすることは可能である。つまり、地中に埋もれた「大雲寺」を掘り出すことが可能であると考えられる。

なお、東塔については盗掘を受けているものと想定されるが、西塔は盗掘を受けていないことから、基壇に埋め込まれた舍利容器が見つかる可能性も高いものと考えられる。また、基壇と基壇の間の空間は削平による破壊を受けていないことから、基壇と基壇の間の空間を下方に掘削し、調査を行なうことで、それぞれの建物の機能を明らかにする鍵が得られる可能性もある。

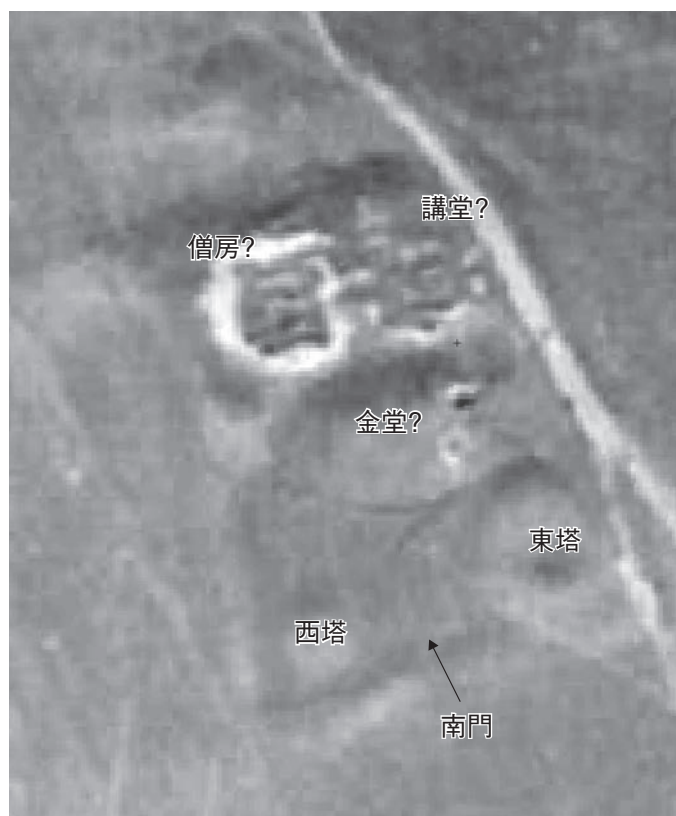


図 22. 大雲寺の伽藍配置想定図

## Ⅷ．第0仏教寺院および大雲寺の存続期間

ここではこの大雲寺と推定される第0 仏教寺院の存続年代に関して検討を行う。

### Ⅷ-1. これまでの見解

1939～40年にこの仏教寺院を調査したベルンシュタムは次のように述べている（川崎・山内 2020, p. 231）。

発掘区Ⅱで検出された建物のプランや建物をめぐる回廊、蓮台に坐す装飾された彩色塑像断片、灯明皿、風貌が非常に独特な彫刻石像断片の出土、さらには日用品の欠如（出土した水差しと桶の一部は、[別な場所から]この場所に運ばれてきた可能性がある）から判断すると、この建物が11～12世紀に、他地域から来た職人たちによって建立された仏教小礼拝堂であった[と推察できる]。もしくはそれは地元の職人たちによる建築であった蓋然性もあるが、この時代の東トルキスタンの宗教施設を完全に模倣した様式であった。

しかしながら、その後、ベルンシュタムはこの年代観を修正し、より早い時期、つまり9～10世紀という年代を提唱したようである（コルチェンコ 2020, pp. 206-207）。

ところが、一九五四年の調査では、より早期の年代である九～十世紀という新しい年代観が提唱された。

これに対し、コルチェンコは次のような見解を述べている（コルチェンコ 2020, p. 207）。

他方、AB-0区は、おそらく、単一層の遺跡ではなく、上層だけが発掘されたのであろうと考えられる。獅子座と香炉がある石碑断片から判断して、八世紀に建設され、十一～十二世紀に最後の改築もしくは再建が行なわれたと推測できる。

さらに、ベルンシュタムは試掘坑3および4における発掘に関し、次のように述べている（川崎・山内 2020, p. 222）。

すなわち、深さ0.50mの地点では、灰色と赤色の丸瓦の[破片の]厚い層が検出された。試掘坑4では、軒丸瓦が出土した。瓦[片]の層の下には、いくらかの日干しレンガと石灰製の漆喰の破片が広がっていた。また火災の痕跡が検出された。

この報告には、試掘坑3および4（つまり、発掘区Ⅱ）地表下に厚い「灰色と赤色」の瓦の破片の層が堆積していたことが記されている。また、発掘区Ⅰの調査および発掘区Ⅱの調査については次のように記されている（川崎・山内 2020, p. 223およびp. 226）

[発掘区Ⅰ：僧院] 芝土の腐植土の下に堆積する固い土層の中には、多量の灰色土器の破片と少量の無釉の土器の破片が混じっていた。深さ0.80m地点では、ぎっしりと積んである日干しレンガ積みの壁が検出された。

[発掘区Ⅱ：仏教小礼拝堂] 厚さ0.30mの薄い表土層を剥がすと、崩落した（赤色と灰色の）屋根瓦の厚い層が現れた。瓦の層は場所によって10～15cm、あるいは20～30cmに達していた。（中略）建物は激しく崩壊していた。建物の遺構を覆っていた瓦と土の堆積層の中、およびその床上には黒い炭と灰の集積—火災の痕跡—があった。

なお、発掘区Ⅰに関する記述に見られる「多量の灰色土器の破片と少量の無釉の土器の破片」については、おそらく灰色と赤色の瓦片を指しているように思われるが、定かではない。さらには、発掘区Ⅱでは火災の痕跡が確認されているとともに、火災の痕跡の下層から仏教関係の遺物が出土しており、また施釉陶器が出土したという記述がないことから、この建物は比較的早い段階で火災によって焼失し、その後再建されなかった可能性がある。

かつて筆者はベルンシュタムの発掘調査の成果に基づいて、以下のような見解を述べたことがある（川崎・山内, pp. 215-217）。

仏教小礼拝堂とされる発掘区Ⅱにおける調査では、試掘坑2、3、4、つまりベルンシュタムが発掘した第0 仏教寺院（AKB-0）では、表土層のほぼ直下で、深さ30～50cmの地点で、赤色や灰色の瓦

の破片の厚い堆積が確認され、その下層から施釉陶器を含む遺物が出土しており、火災の痕跡が確認されている点が注目される。

これまでの帝京大学の調査の成果によれば、特徴的な瓦当を含め、ベルンシュタムによる発掘調査で見つかった瓦は唐代、つまり碎葉鎮城が存在していた時期のものであることが確認できる。その場合、施釉陶器といったカラハン朝期、つまり11～12世紀に年代付けられる遺物が、唐代の瓦片の下から出土していることになる。この出土状況は、唐代に建設された瓦を載せた屋根をもつ建物が後代まで残っており、その建物を利用して後代の人たちが生活し、ある時、火災によって建物が焼け落ちたため、時代的に新しい痕跡が瓦片の厚い堆積の下に埋もれたということを示しているものと考えられる。

考古学者としてのベルンシュタムの判断と年代観は、ある意味、考古学で得られたデータに基づいたもので、妥当なものであったともいえる。しかしながら、建物そのものが古いものの、中にあったものが新しいとは考えず、屋根瓦の断片の下から見つかった遺物や遺構に基づいて、当初、11～12世紀という年代観を提示したものと考えられる。

## VIII-2. 出土した瓦から想定される存続年代の下限

次に2024年の調査で出土した瓦に基づき、第0仏教寺院＝大雲寺の存続の年代の下限について検討する。

2024年の調査で出土した瓦の破片は、いわゆる「灰色」の瓦と「赤色」の瓦からなっている。しかしながら、この「灰色」の瓦と「赤色」の瓦に大きな違いがある。「灰色」の瓦は、AKB-15区で出土している瓦と技法的（裏面には布目の痕跡がある）にも形状的にも類似しており、碎葉鎮城の建設もしくは存続していた時期に焼かれたものと推定できる。他方、「赤色」の瓦は、技法的にも形状的にも異なるものである。裏面には布目の痕跡はなく、形状や規格についても偏差が大きいことが特徴的で、「一枚作り」の技法で製作された可能性が高い。

今後の調査と分析が必要であるが、これらの「赤色」の瓦は、いわゆる唐軍によって焼かれたものでなく、唐軍が撤退した後、「灰色」の瓦を真似て製作されたもので、屋根の補修のために追加で製作された可能性が高い。おそらく、経年の劣化によって

屋根瓦が破損したため、灰色の瓦で葺かれた屋根を赤色の瓦で補修したのであろう。ベルンシュタムの発掘調査で見つかっている「崩落した（赤色と灰色の）屋根瓦の厚い層」もこれに合致しているものと考えられる。

それゆえ、第0仏教寺院にあった瓦葺の屋根を持つ建物群は、唐軍が撤退したのちも、建物そのものは存続しており、おそらく仏教寺院として機能したものと推測される。少なくとも杜環が訪れた頃、つまり8世紀の中頃までは「大雲寺」として存続していたといえる。その後、これらの建物がいつまで存続していたかについて断言することは難しいものの、ベルンシュタムの報告によれば、すべての建物とは言えないが、いくつかの建物については11～12世紀まで存続していたものと推測される。

## VIII-3. 杜懷宝碑との関連から見る第0仏教寺院の建設時期と大雲寺の関係

続いて、杜懷宝碑との関連から、第0仏教寺院の建設年代、そして大雲寺の「建立」について検討する。これについては、齊藤茂雄が優れた検討を行なっていることから、以下にその結論部分を引用する（齊藤2023）。

大雲寺設置以前から、第2シャフリスタンには何らかの中国式の仏教施設が存在していた事になる。そう考えれば、その仏教施設とは、碎葉鎮城の建設とともに唐によって設置されたもの、あるいは、たとえそれ以前からあったとしても、碎葉鎮城の建設とともに中国式に改修されたものだったであろうという結論にいたる。（齊藤 2023, p. 81）

「杜懷寶碑」は682年から684年の間に作られた可能性が高いことから、「杜懷寶碑」を作成した人物は、碎葉鎮城の建設に伴って建設ないし改修された城内の仏教施設に、中原からやって来たのであり、その仏教施設が692年に吐蕃から碎葉城を奪還した際に大雲寺と改名され、751年に当地を訪れた杜環によって報告されたと考えられることを指摘した。

以上の検討により、碎葉鎮城には創建直後から中国式の仏教施設が存在していたと結論付けられる。（齊藤 2023, p. 82）

これによれば、①碎葉鎮城の創建直後にいわゆる

「第0仏教寺院」が建設され、②この仏教寺院に杜懷宝碑をともなう三尊像が奉納され、③692年に唐軍が吐蕃から碎葉鎮城を奪還した際に、[690年の武則天による命を受けて] 第0仏教寺院（名称は不明）が「大雲寺」と改名され、④杜環によって報告されたということになる。

#### VIII-4. 第0 仏教寺院＝大雲寺の存続年代

上述した通り、第0仏教寺院は碎葉鎮城の創建直後に建設されたことから、早くとも679年以降に建設されたこととなろう。当然ながら名称が付けられていたに違いないが、その名称は伝わっていない。その後、692年頃にこの仏教寺院が「大雲寺」と改名されたようである。また、杜環の記録、そしてこの地点から出土した「赤色」の瓦が瓦葺の建物の屋根の補修に使われた可能性が高いという点を考慮すれば、少なくとも、大雲寺を構成していたいくつかの建物は8世紀の中頃まで存続しており、おそらくこの建物群と寺域は「大雲寺」として知られていたものと推定される。

これ以降の大雲寺の歴史について考古学調査で得られた資料を基に推測することしかできない。唐軍が撤退した後であっても、地元住民によって建物は維持され、あらたに赤色の瓦によって補修が行われていた。その間、おそらくしばらくは仏教寺院として機能していたものと推測されるが詳細は不明である。個々の建物によって異なるが、少なくともそのうちのいくつかの建物自体は11～12世紀に至るまで存続していたようであるが、放棄に至るまで、仏教寺院として機能していたかは不明である。

いずれにしても、第0 仏教寺院＝大雲寺は680年頃に建設され、692年頃に大雲寺と改名され、その建物は11～12世紀に至るまで使用されていたこととなろう。

#### おわりに

本稿では、『経行記』に残された杜環の記述を再検討し（「Ⅰ. 杜環の記録と大雲寺」）、これまで知られていた3つの仏教寺院と大雲寺の関係を考察し（「Ⅱ. 大雲寺と3つの仏教寺院」）、ベルンシュタムが発掘した第0 仏教寺院が大雲寺である可能性が高いことを示し、1966年の空中写真等の分析を通して第0仏教寺院の位置を特定した（「Ⅲ. 第0 仏教寺

院＝大雲寺の位置」）。さらには、同じく1966年等の空中写真を用いてAKB-21区およびシャフリスタン2a南西部分における土地利用の変化を明らかにした（「Ⅳ. AKB-21区およびシャフリスタン2a南西部分における土地利用の変化」）。

続いて、1966年の空中写真を用いてベルンシュタムの発掘調査区を明らかにし（「Ⅴ. 1966年に撮影された航空写真に見るベルンシュタムの発掘調査」）、それを踏まえて、2024年春に行なわれた帝京大学シルクロード学術調査団の調査地点がどのような場所にあたるのかを解明した（「Ⅵ. 帝京大学シルクロード学術調査による2024年春の調査地点」）。

また、ベルンシュタムによる調査も含め、考古学的な調査でこれまで得られた知見と文献に残された情報を組み合わせることで、伽藍配置に関する仮説を提示することができた（「Ⅶ. 想定される伽藍配置」）。加えて、これまでの調査や研究に基づいて、第0仏教寺院＝大雲寺の存続年代に関する仮説を提示した（「Ⅷ. 第0仏教寺院および大雲寺の存続期間」）。

本稿では、ある意味、第0 仏教寺院が大雲寺であることを前提として論じてきたが、本当にこの第0 仏教寺院が大雲寺であることを証明するためには、碑文や石碑といった直接的な証拠が必要であることは言うまでもない。

その一方、状況証拠からみれば、第0仏教寺院が大雲寺であることはほぼ間違いないものといえよう。帝京大学と龍谷大学が連携して開始したAKB-21区の発掘調査は、大雲寺の存在、そして大雲寺そのものを解明する端緒となることが期待される。

本研究は、JSPS科学研究費21H04984（基盤研究（S）「シルクロードの国際交易都市スィヤブの成立と変遷—農耕都市空間と遊牧民世界の共存—」研究代表者：山内和也）による研究成果の一部である。

#### 註

- 1) ベルンシュタムの調査に関しては、川崎・山内 2020を参照のこと。
- 2) アク・ベシム遺跡の発掘地点と発掘地点の番号、遺構等の呼称名については、山内和也ほか 2019所収の「補遺—アク・ベシム遺跡の発掘地点と発掘地点番号についての提案」（pp. 194-203）を参照のこと。
- 3) コルチェンコは、この地点を「AB-0区」、仏教寺院址を「AB-0」としている（コルチェンコ 2020, pp. 202-203）。

- 4) 李白（701～762年）は碎葉（スイヤブ）で生まれたとする説があるが、杜環はそれには触れていない。李白の生誕地（スイヤブ）が世に知られていなかったのか、杜環が知らなかっただけなのか、あるいは碎葉生まれではなかったのかということになるが、いずれにしても謎である（吉田豊氏にご教示いただいた）。
- 5) ここで用いた空中写真については、望月・山内・アマンバエヴァ 2020, pp. 61-126を参照のこと。
- 6) 遺構の説明に関しては、発掘担当者である望月秀和氏にご教示いただいた。

## 参考文献

『通典』＝中華書局標点本。

- 岩井俊平「春季調査 AKB-20 区（大雲寺推定地北側）の発掘報告」『シルクロード学研究会 2023夏 資料集』2023, pp.37-42.
- 柿沼陽平「唐代碎葉鎮史新探」『帝京大学文化財研究所研究報告』第18集（2019）, pp.43-59.
- 加藤九祚『中央アジア北部の仏教遺跡の研究』シルクロード学研究 Vol.4, 1997, シルクロード学研究センター。
- 川崎建三・山内和也訳「ベルンシュタムによりアク・ベシム遺跡シャフリスタン2の発掘調査－1939年、1940年－」『帝京大学文化財研究所研究報告』第19集（2020）, pp. 215-245.
- 齊藤茂雄「アク・ベシム遺跡出土「杜懷寶碑」再読－大雲寺との関わりをめぐって－」『帝京大学文化財研究所研究報告』第22集（2023）, pp.71-84.
- 向井佑介『中国初期仏塔の研究』2020, 臨川書店。
- 望月秀和、山内和也、バキット・アマンバエヴァ「空中写真によるアク・ベシム遺跡（スイヤブ）の解析」『帝京大学文化財研究所研究報告』第19集（2020）, pp. 61-126.
- 山内和也、バキット・アマンバエヴァ、櫛原功一、望月秀和、中山千恵、大谷育恵、平野修「2018年度アク・ベシム（スイヤブ）遺跡の調査成果」『帝京大学文化財研究所研究報告』第18集（2019）, pp. 131-203.

- 山内和也訳「クズラソフによるアク・ベシム遺跡の発掘一層序発掘区と第1 仏教寺院」『帝京大学文化財研究所研究報告』第21集（2022）, pp. 157-252.
- 吉田豊「帝京大学文化財研究所によるアク・ベシム遺跡（キルギス共和国）の発掘調査について」『東方学』147(2024), pp. 94-105.
- ジェラルド・クロウソン著、山内和也、吉田豊訳「アク・ベシム遺跡－スイヤブ」『帝京大学文化財研究所研究報告』第20集（2021）, pp. 85-102.
- ヴァレリー・A・コルチュエンコ著、川崎建三訳「キルギズスタン・チュー川流域における中世仏教の考古遺跡（前編）」『東洋学術研究』第59巻第1号（2020）, pp. 197-250.
- 張広達「碎葉城今地考」『文書・典籍与西域史地』広西師範大学出版社, 2008, pp. 1-24.（初出：『北京大学学報』1978-5, 1979）
- Clauson, Gerard, "Ak Beshim - Suyab", Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland, No. 1/2, Apr., 1961, pp.1-13.
- Forte, Antonino, An Ancient Chinese Monastery Excavated in Kirgizia, Central Asian Journal, 38/1(1994), pp.41-57.
- Кызласов Л.Р., Смирнова О.И., Щербак А.М. Монеты из раскопок городища Ак-Бешим (Киргизская ССР) в 1953-54 гг. // Ученые записки Института востоковедения АН СССР. М.-Л., 1958. Т. XVI. С. 514-561 [L.R. クズラソフ, O.I. スミルノヴァ, A.M. シェルバク「1953～1954年のアク・ベシム遺跡の発掘調査中に発見されたコイン（キルギズ・ソヴィエト社会主義共和国）」『ソ連科学アカデミー東洋学研究所の学術紀要』モスクワ レニングラード, 1958, 16巻, pp.514-561]

